

「10年目を迎えて、MOT専攻の変遷とこれから」

(特別寄稿) ものづくり技術経営学専攻(MOT)教授 高橋 幸司 氏



初代専攻長として、MOTの誕生・発展に尽力された高橋幸司教授

「ものづくり技術経営学専攻」は、経済産業省のMOT教育プログラム支援事業の援助を受け2005年に設置され、今年度10年目を迎えた。本専攻を立ち上げた時の専攻長として、この10年を振り返る機会を与えて頂き、大変嬉しく思っている。

MOTの当初の目的は、製造業においては国際競争が一層激化する中、大学や企業の研究成果を事業に結実させ、経済的付加価値へ転換させることの出来る経営人材の育成にあった。掲げたスローガンは「地域企業と共に構築する教育」であり、これは新しい形の地域連携であった。

方法論としては座学よりも実学を重んじることとした。しかも地域に根ざした実践教育である。具体的には、地域企業に教材として製造ラインを提供頂き、学生が改善案を提案する。

また、企業の過去の財務を資料として提供頂き、現在の企業の現状を分析すると共に将来のあるべき姿を提案する。したがって、このためには地域企業の協力が不可欠であり、その結果、地域企業に新たな生産手法や企画案を提案し、さらに戦略的に技術をマネジメントできる人材を企業にお返しすることにより、地域ものづくり企業の総合的経営力を引き上げること考えた。

これを踏まえて、「技術をマネジメントできる人材の育成」そして「自立的製品開発ができる人材の育成」により、地域や社会に対し人材育成インフラとして貢献してきた。

この専攻は、開設以来、この目的並びに運営方法が産業界を中心として高い評価を受けた。その結果、基盤となる「ものづくりコース」(2005年開講)に加えて、生産技術からマーケティング・経営までを総合的にマネジメントできる新たな食農産業の担い手を育成する「食品創製コース」(2006年〜2010年)、アジアを中心とした優秀な留学生を受け入れ日本と母国との架け橋になる人材を育成する「アジア人材コース」

2008年開講、世界市場を俯瞰でき高付加価値型事業を展開し得る人材と技術を育成する「グローバル戦略コース」(2009年〜2013年)と立て続けに3つのコースを加えることとなった。これらは内閣府や文部科学省の事業採択により立ち上げたもので、時限が区切られおり、アジア人材コースを除くコースは閉じられたが、それぞれのコースが高い評価を受けたことは言うまでもない。

また、今思い起こせば、これだけの範囲の広い教育を数少ないスタッフで同時に行ってきたという実績には大きな自信を持つことが出来る。昨年度からはコースを再編し「価値創成コース」として、共通科目に加えて従来のコースを継承するグローバル系科目、イノベーション科目に加えて地域活性・観光系科目を提供すると共に、アジア人材コースを発展させた「とっほくMITRAI(みらい)コース」の2コース制としている。

これはサービス工学と言う概念が生まれてきたことに対応する措置である。すなわち2002年に東京大学では人工物工学研究センターにサービス工学部門を設置し、2007年には産業界技術総合研究所にサービス工学研究センターが設立され、これを受け2012年にはサービス学会が発足している。また、2004年に全米競争力評議会が開催され、ここに提出された「パルミサノ・レポート」には「サービスサイエンスは21世紀のイノベーション」の中心部で重要な課題に



ボリビア多民族国サンアンドレス大学とMOT専攻の学術交流。右から5人目が高橋教授、その隣りが綾部准教授

対処し始めるであろう」と書かれている。それに呼応するかの様に日本においても新たな形態の産業が生まれつつあるのは事実である。これほど動きの速い対応が出来る専攻科は他大学にも見られないのでは無いであろうか。

また博士後期課程も2007年に開設され、より高い能力の習得と併せて、これらを指導できる人材の育成を目指している。

この間、111名の修士(内留学生20名)と6名の博士(内1名論文博士)を社会に送り出している。設立時の学生は企業の工場長や部長、経済産業省や県の職員などが入学し、自分の職務の進め方を確認することを目的として来た方々が多く見られた。その後は、企業の2代目や3代目の経営者が入って来られ、これからの経営の仕方を学んで行かれた。

このように入学者の特徴を把握することが出来たが、最近では目的が種々雑多となっており、それは本専攻が過渡期にきていることを表している。私自身は今まで全速力で走り続けてきたのにブレーキを掛け、地域の製造業の現場で働いている地元出身の若者の能力向上へ奇与すべき時期にきているのではないかと考えている。

その第一弾として地元企業の若手の技術者を集めて基礎的な生産管理や品質管理等の講義を提供し、全体のレベルを押し上げ、その中から入学してくる人達を見出して行くことも考える必要があるのではないであろうか。

また、とっほくMITRAIコースでは昨年度より毎年4名のボリビアからの留学生を5年間に渡り受け入れることとなった。これは次世代電気自動車に必要とされるリチウムを豊富に有するボリビアとの資源外交を推進することを目的としたものであり、このように他大学に無い特徴的なものを進展させて行くべきであると考えている。

MOTの卒業生は地域を支える優秀な人材である。私も自分の研究活動の中で多くの卒業生にお会いする。皆、元気に活発に活動している。しかしながらそれぞれが点としてしか機能していないような気がしてならない。横の連携を密に取り、線として、さらには面として働いてくれる日が来ることを期待している。

その役割を果たすのがY-MOTネットワークであろう。

『私とMOT』 シリーズ編

MOT一期生 山形県企画振興部 齋藤 真幸 氏



齋藤真幸氏は、MOT誕生の企画推進役として携われ、現在は、山形県の文化振興・NPO・プロスポーツ・東京オリンピック関連事業等をご担当中。

「MOT専攻ゼロ年目の覚え書」
ものづくり技術経営学専攻の立ち上がりにかかわったものとして備忘録らしきものを記してみたいと思います。

①はじめに
私にとってのMOT専攻との出会いは、2003年4月、小山学部長から「MOT専攻を開設するのでよろしく。あとは、飯塚先生(当時副学部長)と相談して」との指示を受けたことでした。(当時、山工学部事務長補佐を自称していました。)

②コンセプトを決める
いろいろな情報を収集している中で、断片的なキーワードが集まってきました。それは、「社会人大学院」「ケーススタディ」「PBL」「専門職大学院」などです。情報収集や飯塚先生や高橋幸司先生との議論を重ねていく過程で新専攻のコンセプトが見えてきました。

③高橋プログラムダイレクターの就任
ターゲット、コンセプトが固まりましたので、「科目の編成」「教員の確保」を行うことになりました。(文部科学省への申請なんていうのも必要になります。)

④ネーミングや資金の確保
専攻名をつける話になります。ベンチマークした国内の大学は総じて、企業からの職務入学や大企業に勤務している人などのキャリアアップを意識しており、ケースメソッドやディスカッションなど座学に比重が置かれていました。

⑤キックオフシンポジウムとプレスクール
先生方とカリキュラムも固まってき、シラバスも整いはじめましたので、お披露目と学生募集を兼ねてキックオフシンポジウムとプレスクールを開講することになりました。(社会人大学院であることから、講義は原則土曜日と夜間に行うこととしましたので、プレスクールは、そのテストも兼ねていました。)

⑥そして開設
入学試験なども経て、平成17年4月に専攻が無事開講することとなりました。紙面をお借りして、「指導」ご協力頂きました皆様改めて御礼申し上げます。

・典型的なイメージは、「初代が技術をもって作り上げてきたものづくり企業を継ぐ2代目の養成。初代は試行錯誤しながら技術と経営力を磨き上げ大番頭さんと2人3脚で築き上げてきた会社を2代目はどう発展させていくのか。そのために必要なスキルは?」。

・学生の想定が社会人であること、持続的な定員の確保などから定員数は6名(グループ学習の効果も考え)としました。通学可能なエリア内の会社数300年で代替わりするとして1年当たり新しい経営者が何人生まれるかとか金融機関や行政・産業の支援機関からの入学生数、ストレートマスターの人数とかを想定し定員数を検証しました。

一方、新専攻は、高橋PDのリード(ものづくりには定石がある)ありPDは「日本ものづくり人づくり質革新機構」という団体の理事長をされており、前年には、報告書も出されていきました。

また、地元企業の皆様へのアンケート調査やアドバイザーボードを設置し、教員募集も行っています。

矢矧雄先生による「TPS」(しかも、実際の生産ラインで現場の方と一緒に「カイゼン」を行うという画期的なもの)や赤尾洋二先生による「QDF」、神田範明先生の顧客価値・商品価値創造、齋藤正武先生・横森巖先生(デンソー)による分析手法とトヨタの開発現場による応用事例といったように理論とともに実践にウェイトが置かれていきました。

また、想定学生も中小の製造業の次の経営者です。こうしたことから、「技術経営学専攻」ではなくとなくしつくり来ないような感じを受けていました。そんな中、飯塚教授が「ものづくり技術経営学専攻」というネーミングを編み出されたのでした。

さて、情報を収集するにしても、学外の先生方に、講師を引き受けて頂くにしても旅費などの軍資金が要りますが、大学としての予算はありませんでした。経済産業省でMOT教育を提唱しておられた当時東北経済産業局長の本部と彦氏に、三菱総研の公募情報を頂き、「山大産研」として首尾よく採択されました。

2004年(平成16年)10月27日(水曜日)



米澤新聞

ものづくり技術経営学 外山氏ら記念講演

米沢でプレスクール開講

「追記」PRを一言 会社の周年記念やお祝いなどの折に、是非山形交響楽団・モンテ・イオやまがた・パスラボ山形ワイヴァンズ・山形県社会貢献基金等へ、記念としてのご支援(スポンサード・寄付等)をお願い致します。是非、「一報下ささい。」(saitomasak@pref.yamagata.jp)

(Y-MOTネットワーク)平成26年度総会・新歓コンパ開催



引き続き第二部の懇親会は、2Fcafe吾妻にて大勢の皆様のご参加により開催。高橋文弘氏(第七期生)の名司会により、高橋幸司先生の乾杯のご挨拶からスタートし、和気あいあいの中での楽しい歓迎会のひと時となりました。小野先生、野長瀬先生、志村先生、野田先生、綾部先生、佟先生にもご出席を頂きました。



福島路ビル代表取締役の吉田氏より、演題は「山形大学大学院で学んだこと」の演題でご講演を頂きました。またご来賓として、MOTの生みの親の外山新一氏(電振協顧問)、産学連携夏季セミナー等でお世話になっております米沢電機工業会開発部会長の長澤弘昭氏(㈱ライナー執行役員)のご出席を頂きました。

平成26年4月5日(土)第10期生を迎えて、Y-MOTネットワーク主催の総会及び新歓コンパを開催致しました。「もつくり技術経営学専攻」も卒業生・在校生の総員は約150名の大陣容となりました。当日は伊藤雄三氏(MOT一期生)の司会で、渡邊会長の挨拶に続き吉田重男氏(MOT五期生)のご講演を頂きました。新入生は価値創成コース6名、とうほくMITRAIコース6名の合計12名です。

もっとみらいコンソーシアム総会・シンポジウム開催

平成26年5月14日とうほくMITRAIコース「もっとみらいコンソーシアム」の総会・シンポジウムが開催されました。第5回を迎え(5年目)、総会終了後シンポジウムに移り、児玉専攻長、長谷川健会長(フジクラ電装㈱)のご挨拶を頂きました。引き続き講演に移り、「とうほくMITRAIコースの特徴と留学生教育」:野田博行先生、「日本人学生のグローバル化対応と地域に貢献する留学生教育」:仁科浩美先生、「グローバル化の時代に求められる会社経営と国際人材の活用」:㈱ウエノ代表取締役上野隆一様のご講演を頂きました。続いて本コースの2名の学生から体験発表と全員の自己紹介がありました。約50名の多数の皆様のご出席を頂きました。



← 講演中の上野隆一社長 →
留学生全員による自己紹介



「コーヒースタイルで、こんにちは！」

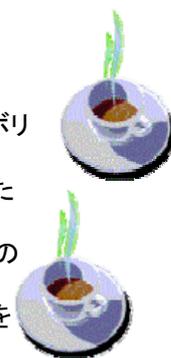
「とうほくMITRAIコース」1年生の池田さんは、日系3世のポリビア人で、2012年にポリビアの大学を卒業後、人生初の日本に留学という形で来日されました。

米沢で暮らしての日本の印象は、安全で便利、ポリビアでも田園風景に囲まれ育ったため、自然も人もとても自分に合っている場所だそうです。

多くの学びとご縁をすることを大切に積極的に色々な体験をされています。「日本での出会いは、自分を何事も前進する力を与えてくれる。」という言葉が印象的でした。

ぜひこの記事を読まれた方、日系人としての誇りを持つ池田さんにお会いする機会を作られてはいかがでしょうか。

コーヒースタイル □ 担当 黒田三佳でした。



池田・アレックス・潤平さん

「MOT 広場」

平成25年度学位記授与式が行われました。



左から喜びの、菊池智幸さん、渡辺光成さん、遠藤正人さん、小林大人さん、荒木 正弘さん

平成25年度工学部及び大学院理工学研究科の学位記授与式が、3月21日(土)に米沢市営体育館にて行われました。当日は学士637人、修士301人、博士9人の計948人が結城章夫学長より学位記を手渡されました。

ものづくり技術経営学専攻科からは、価値創成コースの5名の仲間がめでたくご卒業されました。社会人学生として学ばれ、得られた成果に対して心から敬意を表します。

今後のご活躍を期待し、ご祈念申し上げます！

平成26年度4月入学の皆さんをご紹介します。

ものづくり技術経営学専攻科(MOT)は「価値創成コース」と「とうほくMITRAIコース」の2コース制となりましたが、4月の入学生は「価値創成コース」の4名の方々でした。



写真左から、山口玲子さん、松家昂平さん、網代修さん、黒沼 吉行さんです。

目標を向かって、楽しい学生生活を送りましょう！

ラジオ深夜便 誕生日の花と短歌 365日

短歌とエッセー 鳥海昭子(編集:発行NHKサービスセンター)

著者の鳥海昭子さんが山形県出身(遊佐町)であることを初めて知りました。

6月21日(土)「本誌の発行日」の花は、「テッポウユリ」ユリ科です。

花言葉：純愛

短歌：テッポウユリの 束をかついで 大股の 男がひとり ぐいぐいと行く

今朝の日の出は4時17分、今日は1年で最も昼間が長い夏至です。その差は4時間50分もあり、有効な活用方法がありそうです。低気圧におおわれて変化の激しい天気が続いていますが、外の気配からは今日も雨模様ようです。いつものように聞きなれた懐かしいアナウンサーの声が！その声を通して、その人の人柄をイメージする、そして共感することや学ぶことがいかに多いかを知らされる毎日。

今日も何か良い事がありますように！、とアンカーが深夜便を締めくくってしてくれる。

また共感！ 有難うございました。

(A編集委員)



《編集後記》

TVはWWカップ一色、深夜、早朝のライブ放送、寝不足が続きます。かたやイラク、ウクライナの紛争は悪化の一途、ガソリン高騰も含め、まったく出口が見えません。同じ戦線でも、日本は梅雨戦線、就職戦線のはじまり、MOTでも第5回目「もっとみらいコンソーシアム総会・シンポジウム」、山形県内企業に就職を希望するMOT留学生を支援について協議、総会後に国際人材育成シンポジウムも開催されました。

日経平均15,000円回復、法人税20%台への政策審議など景気の良い話が続きますが、学生の就職前線は明るいのか？ 本当に地方の景気は良くなるのか？ 期待は膨らむばかりです。「やまがた商い寄席」では「グーグルが必要なことは、みんなソニーが教えてくれた」の辻野昇一郎氏による「今後10年で産業構造の秩序が変わる、地方の中小企業が生き抜く技」と称した講演がありました。氏の現在の経営の場はクラウドファンディングサービス。「地方が…」ばかりとは言っておれないと少し反省しました。 <編集委員一同>

《MOT事務局便り》

MOT事務局が模様替えをしました。是非お立ち寄り下さい。

MOT事務局

平成26年10月入学予定者は現在5名(ボリビア国からの国費留学生4名及び中国からの留学生1名)尚、8月に実施予定の入学試験の合格者は含まれておりません。

平成26年9月修了予定者修士学位論文公聴会
平成26年8月23日(土)
(於:4号館中示範A)

MOT事務局より、大学の動きやMOT専攻に関わる情報をお知らせ致します。